

『どいつにも真似できない麺を作る！』 - 彩暁

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

「台湾ラーメンがあればドイツラーメンもあっていいじゃないか！」
パンと机を叩き、麦沢麴(むぎさわこうじ)は主張した。
「……何なんだいきなり」
学校から帰宅したばかりの兄、醇介(こうすけ)は啞然とした。
「だから台湾ラーメンがあるんだ。それなら——」
「何でそんな話になったんだ？」
慌てて喋る弟に対し、醇介は落ち着いて口を開いた。
「あう……ああすまん」
一呼吸して、麴は落ち着きを取り戻す。
「今日さ、学校の帰りにな、ちょっと友達と『サテー』に行ったんだ。それでな、台湾ラーメンというのを食べたんだ」
『サテー』というのは大規模なショッピングモールだ。某大手量販店とは関係がない。
「ほうほう。そもそも台湾ラーメンって何だい？」
「簡単に言うと坦々麺みたいな奴だよ。名古屋フェアというのを『サテー』でやっててな、そのフェアの一環だからどうも名古屋の名物らしいぜ」
「なるほど。うちら関東人にとっては縁がない食べ物だな」
「ああ。それでな、俺は閃いたんだ。台湾ラーメンがあるんなら、ドイツラーメンも作ればいいんじゃないか？ うまそうじゃん、ソーセージにな、ジャガイモにな——」
「じゃあ今日の晩飯はなしでいいのか？」
呆れながら醇介は話を切った。
「ああ……って聞いてくれよ兄貴い」
そして弟は家を出ていった。彼がどこに行ったのかは、誰も知らなかった。

時は流れ、五年後のこと。
「うえ、うぶっ……あのアホ、散々飲ませやがって」
金曜日の夜、醇介は千鳥足で夜道をぶらぶらしていた。少し前まで、会社の同僚に酒をかなり飲まされていた。最早、家に帰るといふ目的を覚えているかどうかも怪しい。シャッターの下りた店舗が並ぶ道を、彼はただふらふらと歩いていく。
「うわっ！」
交差点を横切ろうとしたところ、クラクションとともに急ブレーキの音が響く。気づくのがもう少し遅ければ、トラックに撥ねられていただろう。
「す、すみません……」
トラックに向かって謝った後、彼は改めて横断歩道を渡った。そして何も考えずに直進する。
何も考えずにシャッター街をひたすら歩く途中、灯りの点いた店が一軒、醇介の目に映った。店から漂ういい匂いが、酔いの回った鼻と脳を刺激する。炭水化物が欲しいという本能に従い、彼は匂いのもとへと近づいていく。そして迷う事なく、彼はラーメン屋の戸を開けた。
「いらっしゃーい……」
やる気のない声で出迎えられたと思ったら、店主は醇介をじっと見つめた。タバコを吸いながらテレビに向かって座っていた店主がこちらの顔を見た所——
「もしかしてあんた、兄貴……」
「おま……麴か？」
酔いで目が回っていないながらも、醇介は弟をはっきりと認識した。

「兄貴！ 久しぶりじゃねーか」
「おま、ラーメン屋やってんのか？ ……うぶっ」
突然の再会で酔いが醒めながらも、吐き気が酔介を襲う。
「苦しいのか？ ほれ、水だ。トイレはそっちの扉だ」
「飲み過ぎたが大丈夫だ、とりあえずはな」
水を少し飲む酔介。
「兄貴、何年ぶりだろう？」
「さあ知らん。それよりラーメンを……うぶっ」
「無茶すんなよ兄貴」
「平気だ……とにかくラーメン」
吐き気を抑えながらも酔介は伝える。
「あいよ、じゃあとおきのやつにするな」
そう言って弟は厨房に入った。
しばらく水を飲みながら酔介は待つ。テレビでは『トリプルトースト』という名のハンバーガーのCMが流れていた。豆腐を三枚挟んだだけという、単純な代物を彼はぼーっと眺めた。
「なあ麺、トリプルトーストって知ってるか？」
「ああ、あれね。『スーパーそざい』の新作らしいよ。食った事ないけどね」
麺を茹でながら麺は答えた。
「酔い醒ましには良いかもしれないけど、これって売れるのか？ あそこって何か美味いメニューはあったっけ？」
『スーパーそざい』とはベジタリアン向けのバーガーチェーンだが、肉類付きのメニューが少なく、奇抜なバーガーばかりを開発することで知られている。
「ウイナーサンド以外は微妙だぞ。ドリンクもオレンジジュースしかなかったし」
「そーいやそうだなあ。でも何故か経営状況は悪くないんだよな。世の中って不思議なものだ」
しばらく経って、カウンターから熱々のどんぶりが差し出された。
「はい、ドイツラーメンお待ち」
自信満々な表情で麺はラーメンを出す。
「ドイツ……ラーメン？」
目の前にあるのは確かにラーメンっぽい。だが、どこか違う。まずトッピングがなんともいえない。巨大なソーセージがまるまる一本、ジャガイモまるまる一個、キュウリのようなものまるまる一本、それにバターが一かけら。ドイツらしいと言えなくもない。それらはよしとしても、香りがどこかおかしい。外で嗅いだ匂い——塩ラーメンっぽさはあるのだが、それに加えて何か不思議な匂いも混じっている。
「何だこれは？」
「ラーメンだよ。兄貴のために精一杯作った特製のドイツラーメンだ。ささっ、食べてくれ」
「ああ……それとこのキュウリみたいなのは？」
「モロキュウを煮てみたんだ」
「なるほど、変わったトッピングだな……じゃあ頂く」
違和感を感じながらも、酔いの勢いで酔介は麺を食べた。
「げはっ！」
一口入るや否や、酔介の舌になんとも言えない違和感が広がり、それにつられて胃が刺激された。
口の中で、塩ラーメンかコンソメスープか、どちらともつかない味が広がっていく。それに加え、ビールのような不自然な苦味が混じる。
「ちょっ、兄貴。どうしたんだ？」
「う、うげ……げっ」
グラスに注がれていくビールのごとく、胃から沸き立つ吐き気が食道を昇り、口へと溢れていく。
「げぼぼっ、げぼっ！」

見るに堪えない吐瀉物がカウンター周辺に撒き散らされる。

「兄貴ッ——！」

——頭が痛い。口の中に変な味がある。天井が見える。ここは……どこだ？

目を覚ますと、酔介は布団の中で眠っていた事に気付いた。頭の隣には、酸っぱい匂いのするゴミ袋があった。

——そういえば俺、確かラーメンを食ってその後……あまりの不味さに吐いたんだっただな。にしてもスープにビールって、どんな味覚をしてんだあいつは。それよりここはどこなんだろう？ 部屋からして普通の家なんだが誰の家なんだ？

そうこう考えている中、突然ベルのけたたましい音が聞こえてきた。辺りを見渡すと、音は黒電話から鳴っていた。

「電話かいな。あー困った、出れねー」

弟の声が部屋の外から聞こえる。弟は手が離せない。音を鬱陶しく感じた酔介は仕方なく電話に出た。

「はい、もしもし」

だるそうな声を出す酔介。

『もしもし、佐々金融(さざきんゆう)のものですが、麦沢さんですよ』

声がやや甲高い、中年の男性の声が聞こえた。

「はい、麦沢ですが」

眠気眼をこすりながら、酔介はとりあえず答えた。

『えー四月にそちらへ一億円を貸していますが、まだ一円も返済されていませんがどうですかね』

一億円という言葉に反応し、酔介は一瞬で目が覚めた。

「私は麦沢の兄ですけれども、弟に何か伝えることはないでしょうか？」

『兄ですか。でしたら何でもいいので金を返してくれませんか？ ちょっとこっちは弟さんに困っているんですよ』

行方を眩ましたかと思ったら、借金をしていた。そんな事実を知り、酔介は溜息をついた。

『話に聞きましたが、弟さんはラーメン店を経営しているそうですね。どうやらあまり繁盛していないようですが、どうでしょうか？』

「そうなんですか。うちも久しぶりに弟と再会したばかりですからよく分かりませんが、最悪、店を売ってでも金を返すよう伝えておきます」

『分かりました。よろしくお願いします』

乱暴な音とともに電話が切れた。二日酔いで頭がガンガンする。

「済まない済まない。電話に出てくれてありがとな」

階段を上る音がしたかと思ったら、麴が戸を開けた。酔介は不機嫌そうに弟を見つめる。

「おはよう。昨夜は無理にラーメン食わしてごめんな」

麴の台詞に対し、酔介は無言のままだ。

「兄貴……どうしたの？」

心配そうに麴は聞く。

「お前……借金してるのか？」

「えっ？」

びくっと弟は凍りついた。

「さっきの電話、金融会社からだったぜ。勝手に一億借りてんのか？」

麴は無言で立ち尽くす。

「借りてるんだな」

再度の質問で、麴は頷いた。

「まったく馬鹿かお前は。勝手に家を出て、借金して、店を開いて……しかも客が入らないと聞いたが本当か？」

「……………」

無言のまま弟はうつむいてしまった。

「とりあえずこの店はさっさと畳んで売れ。商売もできない癖に店を開きやがって」

「嫌だ!」

聞き分けの悪い子供のように声を張り上げて、弟は抵抗した。

「嫌じゃねえだろ。お前のせいでどんだけの人に迷惑がかかっているか解るか？」

酔介は咄嗟に麴の胸倉を掴み揚げ、恫喝した。

「俺はこの店を続けるんだ!」

力いっぱい、芯のある声で弟は再び主張した。

「まだ分かんねえの——」

「話を聞いてくれ。この店は俺が開いたものじゃない」

「どういうことだ？」

「これはな、水原の伯父さんが守り続けた店なんだ」

「水原(みずはら)の伯父さん……ラーメン屋をやってたのか？」

酔介は母方の伯父、水原冠水(みずはらかんすい)と何度か会った事があった。いずれも幼少の頃だったが、とにかく飄々(ひょうひょう)としていて、身元も分からないおかしな人だった事を覚えている。

「ああ、ふとしたきっかけで俺はここのラーメン屋に入ったんだ。そしたら伯父さんが昔話を語ってくれてね。孫が可愛かったとか、ちょっと冒険して店を開いたとかな——」

どうやら弟は、一人旅をしている間に伯父のラーメン屋に偶然立ち寄っていたそうだ。伯父の昔話を聞いているうちにもしかしたらと思い、こちらから聞いてみたところ、やはり伯父だったとの事だ。

「それで、伯父はどうしたんだ？」

「去年の一月に突然いなくなったんだ。店と借金を残してな」

顔を落として、麴は答えた。

「いなくなる前日、伯父は店を守ってくれと、俺に言ったんだ。俺はラーメンが好きだ。だからこの店を任せられるのは願ったり叶ったりなんだ。伯父との約束がある以上はこの店は売れない」

麴は大真面目に続けた。

「伯父のものがどうかは知らねえけど、今の自分を考えてみるよ。あんなラーメンで店をやっていけるか？」

対して、酔介は呆れていた。

「昨夜のラーメンじゃ誰も食いに来ないぞ。お前もさっさと逃げないとマグロ船だぞ」

「マグロ? ……もしかして刺身にされちゃうのか？」

「違う。誰が食べるか」

「それじゃあ駅のホームで後ろから誰かに押されて、そして轢かれて……」

「そのマグロじゃない。漁をして金を返すってことだ」

「うう、それは無理だよ……でも普通のラーメンなら作れるから」

「そうなのか? じゃあ俺に普通のラーメンとやらを作ってくれないか? お前の腕が知りたい」

「分かった」

そう言って、麴は下に降りていった。

「お待たせ」

再び麴が、ラーメンを手を持ってやってきた。

「これがお前のラーメンか」

白い透明なスープに細麺が沈み、表面は様々なトッピングで彩られている。メンマ、バター、チャーシュー、ハウレンソウ、玉子。見た目はオーソドックスな塩ラーメンだ。

「では、頂こう」

早速俺はスープをかき混ぜ、麺をすくい上げる。麺をすすりながら、険しい表情でしばらく沈黙する。

昨夜のやつがあまりに凄まじかったせいか、醇介にとって最初はとても良い味に感じた。だが、しばらくして変な後味が舌に残る。しかも麺にコシがない。チャーシューが塩辛いだけだ。ホウレンソウに味がない。

「駄目だな。これはラーメン店が出すものじゃない」

最終的に醇介はこう評価した。

「兄貴……」

評価を聞いた麴はしょぼくってしまった。

「お前さ、店開く前に料理ってしたことあるのか？」

「伯父の手伝いを少ししたぐらいなんだ。皿洗いとか、掃除とか」

「料理はほとんどした事ないんだな」

醇介は再び呆れていた。

「そうだ。伯父さんはあまり作り方を教えてくれなかったし」

「じゃあこの店はさっさと捨てて逃げろ。借金抱えるよりちゃんと自分に合う仕事を見つかることだな」

「兄貴……」

何か言いたげな顔をして弟は口をつぐんだ。

「俺、それでも店を続ける。頑張って美味しいラーメンを作ってやる。他の仕事をするくらいなら死んだほうがマシだ」

「何を言ってるんだ？ これ以上家族に迷惑をかけるような事は止めてくれないか」

「ここは俺の店だ。どんな結果になろうとも俺一人でどうにかする。だから兄貴、お願いだから店をやらせてくれないか？」

弟の瞳はまっすぐに兄の視線を貫き続ける。これまでにない覚悟に、醇介はしばらく何も言えなかった。

「一億の借金を滞納しているんだぞ。ラーメンを作るだけで金が返せると思うか？」

「それでも構わない。何とかして俺は店を続ける」

「はあ……俺は手を貸さないぞ」

溜息をついた後、醇介はしばらく麴の様子を見る事にした。

「麴、来週また来る。そのときに腕が上達しなかったらぶん殴ってでもこの店を捨てさせるからな」

やりたいだけやらせて、最後に諦めさせよう。醇介はそう考えていた。

その日の夕方、醇介は自分の彼女と喫茶店にいた。

「ねえ、醇ちゃん。何ぼーっとしてるの？」

醇介の彼女、蓮華(れんげ)が声をかけてきた。

「あ、ああ。ちょっと弟のことで考え事してたんだ」

「弟がいるの？ 初めて聞いたわ。今いくつなの？」

言われてみて、醇介は蓮華に弟の話をしたことがないことに気づいた。蒸発していたから会う機会もなく、話す機会もなかったためだ。

「そいつは俺の二つ下なんだ。つい昨日まで消息不明だったんだけど偶然再会してな。ラーメン屋をやってるんだ」

「ラーメン屋をやってるの？ すごい！」

急に蓮華の眼がきらきらと輝いた。

「そんなに繁盛してないぞ。それにラーメンもまずくってな。あはは……」

蓮華の突如の食いつきっぷりと、弟の無謀さを思い出して醇介は苦笑した。

「でもラーメン屋をやってみようって考えて行動するのがすごいよ。連れてってくれる？ 今日の晩御飯でもいいから」

ノリノリで蓮華はせがむ。

「晩御飯にするにはちょっと良くないぞ。まあでも一回は食べるのもいいかもしれないし、行ってみるか」

ドイツラーメンを食べるならともかく、普通のラーメンなら問題ないだろう。酔介はそう思っていた。

「うんっ！」

元気良く蓮華が答えた。

「へいいらっしゃい……って兄貴。来るの早いじゃないか」

扉から、酔介と蓮華が入ってきた。

「邪魔するぜ」

「おーっ、ここが弟さんのラーメン屋なんだね」

酔介の後ろに蓮華がついてくる。

「兄貴、知り合いなのか？」

「ああ、俺の彼女だ」

「か、かのじょ？ 兄貴に、彼女？」

目が点になりながら、麴は二人を見つめた。

「信じられないって顔するなよ」

「悪い……兄貴の、オコジョなのか」

「落ち着け、どう見ても女の子だろ」

「はいはい。私は酔ちゃんの彼女だよー」

元気よく蓮華が答えた。オコジョと呼ばれたせいか、顔に少し青筋が入っているように見える。

「というわけなんだ。信じてもらえたか」

「ああ、とりあえずは。ところで二人は何を注文する？」

「じゃあ私はドイツラーメー——」

「待て、それは危険だ。蓮華にはラーメン一つ。俺には餃子二つとライスで」

蓮華が注文しかけた所を酔介は止めた。

「ぶーぶー、私に選ばせてよ」

膨れっ面で蓮華が抗議する。

「いきなり変化球はきついぞ。それにあのラーメンで俺は吐いた。だから今日はラーメンにしようぜ」

酔介が説得する。

「うー……わかった」

渋々と蓮華は引き下がった。

「ラーメン一つ、餃子二つ、ライス一つね。兄貴はラーメンいらぬのか？」

「お前のラーメンはもう食った。今日は餃子が食いたい」

「へい、承知しやした」

威勢のいい声とともに麴は麺をゆで始めた。茹で上がるまでの間、鉄板を使って冷凍の餃子を調理した。じゅわっと鉄板から蒸気が放たれる。

「いつから二人は付き合ってるんだい？」

「高三の四月からだ。二年の時のクラスメイトだったけど、学年が上がってからいきなり告られたんだ」

「きっかけは文化祭だわ。二人で模擬店の準備や制作をすることが多くて、最初は仲の良い友達感覚だったけど段々意識するようになってね……三年に上がってから告っちゃったの」

昔を懐かしみながら蓮華が語った。

「こうして二人でいると、後夜祭の後にラーメン屋に行った事を思い出すね。蓮華はラーメンがいまいちだったとか言ってたけど……だよな？」

「あ、うんうん。そんな事もあったね。でもどんな味でも、酔ちゃんと二人っきりっただけで楽しかったわ」

蓮華が嬉しそうに言った。

「とても羨ましい思い出ですね。俺も高校を中退しなければ良かったかもな」

しみじみと麴が言う。昔話に区切りがついた丁度その時、麴は出来上がった餃子を皿

に盛りつけた。

「はい、まずは餃子とライスね」

カウンターから熱々の餃子とご飯が出てきた。見た目には特に変わったところはない。

「ラーメンはまだみたいだな。蓮華、ちょっと食べてみるか？」

「酔ちゃんいいの？ おかずが少ないのに」

目の前にあるのは餃子二セットで十個、それと男茶碗に盛られた並盛のご飯。餃子をもう一セット欲しい所だけど、食費的にこれで抑えてある。

「いいんだ。俺が先に食うのは蓮華に悪い。一緒に食おうぜ」

「わーい、酔ちゃん優しい」

嬉しそうに箸で餃子を一つつまむ。

「はむはむ……おいしいわあ。とっても幸せって味がするわ」

「それは愛情補正だな。ていうか弟がいる前でいちゃいちゃは勘弁してくれないか」
弟に視線を向けると、どんぶりに盛りつけをする作業に集中していた。

「もー、酔ちゃんったら冷たいなあ」

再び頬を膨らませて、蓮華はひねくれた。

「恥ずかしいだろ。今晚はうちに来いよ、それでいいだろ？」

「酔ちゃん家に遊びに行けるの？ やったあ」

大喜びではしゃぐ蓮華に対し、酔介は顔を俯かせた。蓮華は誰からみても可愛いのが、いちいちラブラブっぷりを表に出すのが困りどころだ。それも酔介にとって魅力ではあるが。

「へい、あつあつな二人にあつあつなラーメン用意したぜ」

「おっラーメン来た来た」

わくわくとした様子で蓮華はどんぶりを受け取った。

「いっただっきまーす。ずるるる……」

おいしそうにラーメンをすする蓮華。最初こそ幸せそうな表情だった。が――

「ずるるる……ずるっ。うーん……ずるるっ」

途中で何か考え事をして、再び麺をすする。柔和な表情も、今は真剣な顔つきになっている。

「はむはむ……」

次にチャーシュー、味玉、メンマを少しずつ食べる。顔つきはさらに真剣になった。

「すっ、ごくん」

スープを一口飲む。蓮華は一度目を閉じ、手の動きを止めた。

「やっぱ、不味いのかな？」

その光景を弟は心配そうに見つめる。

「ごくん、ずるるるっ……」

黙々と箸を進める蓮華。

「ごちそうさまでした」

しばらくして、蓮華は全てを食べ終えた。

「その、どうでしたか？ もし不味かったら申し訳ないです」

「うーん……」

少し唸った後、蓮華はすぱっと答えた。

「正直言ってあまり美味しくない。麺は素材がよかったけど、ちょっとゆで過ぎ。スープもなんか微妙」

「やっぱり微妙ですか……」

弟はうなだれた。

「でも店をやってこうって意志はすごいと思うわ」

「ありがとう」

その後、蓮華は少し考え、こう言った。

「それでね……私、考えたんだ。名前は麴君だよな？」

「はい」

「麴君、私がラーメンの作り方を教えるわ。こう見えても結構自信があるんだ。プロ

まではいかないけど、ある程度なら教えられるわ。味覚にも自信があるし」

「おい、蓮華。今日はうちに寄らないのか？」

慌てて醇介が口を挟む。

「醇ちゃんごめんね。でも、このままじゃ誰も食べに行かなくなって店がなくなっちゃうよ」

「それはそうなんだけどさ——」

醇介は反論しようとした。

「醇ちゃんの弟でしょ？ 醇ちゃんが困るのも、醇ちゃんの家が困ってるのも放っておけないの。それに、私なら何か力になれそうだから。ね、醇ちゃん？」

上目遣いで蓮華がお願いをする。

「そうか、なら分かった」

不満ながらも醇介は認めた。

「麴、教えてくれる人ができて良かったじゃないか。だが一つしておく」

店を離れる前に醇介は一言述べた。

「蓮華は俺の嫁だからな。お前にはやらんよ」

「やだもー、醇ちゃんったら。嫁なんてはずかしいわあ」

わざとらしく蓮華は反応した。

「こっちが恥ずかしいわい。まあいつか蓮華に女の子でも紹介させとくからさ……とにかく頑張れよ、麴」

「あ、ああ。頑張る」

バカップルぶりを見てぼかんとしていた麴は我に帰った。

「はーい、ストップ！ どうしてこんなに長く鰹(かつお)だしをとってんの？」

醇介が帰った後、二人は早速特訓を始めた。とりあえず蓮華が納得するようなラーメンを作る、というのが目標だった。

「だって勿体無いですし……」

不満そうに、麴はスープの中の鰹節を見つめた。

「美味しいラーメンを作るならけちになっちゃダメ。これだけ長時間だしをとると臭みも出ちゃうじゃない。さっと湯に通す、それだけでいいのよ」

「お湯にさっと通す……」

ポケットからメモ帳を取り出して記録する麴。

「それとこの麺じゃスープに合わない。つけ麺用だけどどうしてそれ選んだの？」

「ドイツといえばヨーロッパで、スパゲッティかなって思って」

「ラーメン屋に行った事ある？ 塩ラーメンでこんな太麺なんて出さないわよ。これからはもっと細い麺を使いなさい」

ついさっきの雰囲気か嘘のように、蓮華は厳しい口調で指摘した。

「はい……」

「あとトッピングがひどいわ。何もかもがひどい。チャーシューも味玉もしょっぱ過ぎ。どうやって作ったの？」

「えと、これは醤油に漬けて——」

「醤油だけだと何のひねりもないわ。塩ラーメンには最悪よ。あと、もっと良い醤油を使いなさい。安物なんかとは全然違うわ」

ダメ出しをした後、彼女はこう切り出した。

「私の言ったとおりにスープを作ってみなさい。簡単にはできないけどまずはそれからよ。美味しいものができるまで特訓ね」

「はいっ」

「私が認めるまで今夜は寝かせてあげないから」

「特訓、寝かせない……それってもしかしてえすえ……むぐう！」

「あらあ、何か言ったかな？」

いきなり蓮華が拳で麴のこめかみをぐりぐりした。

「すみません……冗談です」

「下らない冗談は嫌いよ。はい、スープ作って」
麴の特訓は日付が変わるまで続いた。

日が流れて金曜日。いつも通りに仕事を終え、いつも通りに帰宅しようとした矢先、ポケットから携帯の振動音が伝わった。醇介にとって、知らない番号からの電話だった。

「はい、もしもし」

『もしもし、俺だよ俺』

金貸してくれ、と続きそうな口ぶりだった。

「どちら様でしょう？」

こちらには覚えがないのに慣れ慣れしくふざけている相手に、醇介は苛立ちを覚えた。

『おっと済まない。甘木(あまぎ)だ。ほら、高校の時同じクラスになったろ?』

「甘木……おお、久しぶりじゃないか」

久しぶりの友人の声に醇介は怒りを忘れた。甘木は高校時代の同級生だった。

『覚えてくれてたのか。嬉しいな。元気か?』

「元気だぜ。お前は今、何をしているんだい」

『こっちは東京で金融系の仕事をしていてな。色々大変なんだよ。そっちはどうだい?』

苦笑しながら甘木は言った。

「俺も東京で仕事をしているぜ。調子はまあぼちぼちって所だな」

『そうかそうか。元気そうで何よりだ。ところで醇介、今週の夜はいつか空いてるか?』

「今週なら基本的にいつでも大丈夫だが、どうしたんだ?」

『そうか。じつはちょっとあんたの所と取引をしたいんだけどね、友人がいるなら直接相手をしてくれと頼まれたんだ。それで、水曜日の夕方五時は空いているか?』

「水曜日か。良いぞ」

『よし。じゃあ会議室を借りるのでそこで話をしようか』

「おう。じゃあよろしく、またな」

『また水曜日な』

通話が終わった後、醇介は早速蓮華に電話をした。彼女はアポなしで押しかけることがあるのと、不在でがっかりさせたくないためだ。

『はいもしもし』

「蓮華? 醇介だ。今電話は大丈夫か?」

『ごめん、今は手が離せない』

受話器からじゅわっという音と誰かが慌てている声が聞こえる。

『こら、鍋が火を噴いたくらいで慌てるな。落ち着け』

電話の向こうで、蓮華が慌てている人を叱責する。

『あわわっ、すみませーん』

誰かと思ったら麴だった。

「もしかして、弟の店か?」

『あ、うん。そうそう。じゃあ悪いけど切るよ』

「すまん」

こっちが言い終わる前に電話の切れる音がした。

「弟も気になるし、店に行ってみるか」

「いらっしやいませー。醇ちゃん、来てくれたのね」

出迎えてくれたのは弟ではなく、蓮華だった。

「お疲れ様。さっきは忙しいのに電話して悪いな」

「いいのよいいのよ。こうやって醇ちゃんと会えたんだからーん」

厨房から出てきた蓮華は、エプロンにバンダナ姿のまま俺に強く抱きついた。

「ぐえ……って他の客がいるだろ。それに調理服姿で抱きつくな」

店内では家族連れの客が、箸を持ったままぼかーんとしていた。

「ハッ……あっ、失礼しました」

周囲の状況に気付いた蓮華は、慌てて厨房の方へと戻っていった。

「すみませんね、恥ずかしいところをお見せしまして」

俺は放心状態の家族に謝った。

「いや、いいですよ。熱々なお二人ですね」

照れながら父親が答えた。

「どうもー」

「おにいちゃんかおまっかー」

「まっかー」

姉妹に指摘されてしまった。

「こらっ、お兄ちゃんが恥ずかしがってるじゃないの。すみませんね」

母親が姉妹をなだめる。

「いえいえ。そのうち二人もあんなお姉ちゃんみたいにきれいになるんだよ」

醇介は適当に言った。

「ほんと？ じゃあおにいちゃんもあたしに惚れるのかな？ どーしよーかなー」

妹らしき方がわざとらしくいたずらっぽく目を向ける。

「あはは、照れるな」

「でもあたしがお姉ちゃんになった時は、お兄ちゃんはおじさんだよ」

妹らしき方がつつこむ。

「だねえ、ははっ」

醇介は苦笑いをしながら、改めて席に座る。

「兄貴、今日は何にする？」

弟に言われてはっとなった。麴と蓮華が気になるから寄ってみただけの醇介は、注文することを考えていなかった。とりあえず修業の成果でも拝見しようと、壁のメニューを一瞥する。

「とりあえずラーメン、あと生中と餃子」

「あいよ」

注文を聞いた麴は早速、鉄板に油を敷き、冷凍の餃子を焼き始めた。豪快な蒸気としゅわっと焼ける音が鉄板から放たれる。一方、蓮華は麺を茹でていた。

「今日のラーメンは蓮華が作るのか」

「ああ。まだまだ発展途上だから私がやるって言われたんだ。昼間は俺が作ってるけど……」

ジョッキにビールを注ぎながら麴は言った。

「もしかして蓮華、麴に惚れた？」

「え？ そんなわけないじゃん。私、ラーメン作るの好きだから」

麴をゆでながら蓮華はすぱっと言った。

「仕事はどうしてる？」

醇介は続けて聞いてきた。

「いつも通りだわ。ほら私、仕事が終わるの早いから」

「そうなのか。あまり無理をするなよ」

「醇ちゃんありがとう。疲れたら一緒にごはん食べよう」

そして蓮華はもやしを炒め始めた。可愛らしい見た目からは想像もつかないような素早い手さばきで中華鍋を動かしている。

「はい、まずは餃子と生中」

カウンターから、弟が酒とつまみを差し出した。

「ありがと。じゃあいただきます」

くいとビールを一杯飲む。一日の疲れが溶けていく気がした。ビールに餃子のコラボレーションが感動的な美味しさとなる。

「はい、ラーメンお待ちどうさま」

醇介がビールを半分飲み終わった頃、蓮華がラーメンを差し出した。

「ありがとう、おっおいしそう」

具の形、盛りつけ方からして素晴らしい。早速麺を食べると、コシが弟の麺とは全然違っていた。スープもその辺の店に負けない位に上出来だった。蓮華は料理が上手だが、まさかラーメンをここまで美味しく作れるとは醇介は思ってもみなかった。

「美味いじゃないか。とても素人が作ったものとは思えないよ」

「えへっ、ありがとう。私のパパはラーメン屋をやってるんだ。これでもパパのには負けるけど」

厨房の熱気で汗をかきながら蓮華は照れた。

「そんな話を聞いたことあるような気がする。この味で蓮華の親父にも及ばないってことは、親父のラーメンは相当美味いんだろうな」

醇介は素直に感心した。

「そうなのよ。パパの店って高校の近くにあるんだけど、学生の間でも美味いって評判でね。平日の夕方はいつも大忙しなんだ」

「そうなんですか。じゃあなんで親の店を継がなかったんですか？」

食器拭きをしながら麴が質問する。蓮華は一瞬だけ作業を止め、過去を回想した。

「うーん……小さい頃、ラーメン屋をやりたいってパパに言った事があるんだ。そしたらとても忙しいし、難しいし、きっと恋愛もできないって言ってたわ。それで悩んでただけど、気がついたらただの会社員になった、ってとこかな？」

「ほう……」

醇介は聞きながら頷いていた。

「でもやっぱりラーメンを作る事ってとても楽しいと思うわ。醇ちゃんと結婚したら店をやってみるのもいいかなって思う」

「面白そうじゃないか。俺もラーメンを作ってみたくなるな」

「その時は私が教えてあげよっか？ 麴君みたいにビシバシいくけど」

「教えてくれるときはお手柔らかにな」

笑いながら醇介が答える。

「蓮華、話は変わるが水曜日はちょっと家にいないんだ。だから押し掛けても部屋に入れないよ」

「そっかあ……わかった」

蓮華は少し落ち込んだ。

「まあ、水曜以外ならいつでもおいで。高校でさ、甘木ってやつ覚えてるか？」

甘木、醇介、蓮華は同じ高校の同級生だ。

「餃(ぎょう)ちゃん？ 覚えてる覚えてる。懐かしいなあ」

渾名の『餃ちゃん』は、甘木の下の名前餃次(ぎょうじ)から由来している。

「それでそいつと再会して、仕事の話をする事になったんだ。悪いな」

「仕事なら仕方ないわ」

渋々と納得する蓮華。そして溜まっていた洗い物を処理する作業に入った。

「ところで麴の腕はどうなんだい？」

他の客も帰って落ち着いたところで、醇介は蓮華に聞いてみた。

「うーん、確かに職人としてはまだまだだけど、ところどころに光るものを感じるわ。きっとこれから成長するよ」

「そうか。良かったな麴」

「えへへ、照れるな」

麴は喜んだ。

「でもまだまだヘッポコ料理人ね。上達したければもっと頑張るのよ。……あっ、ほら、そろそろ麺が茹で上がるわ」

「はいっ」

ささっとざるを揚げて、水を切る麴。せっせっせとどんぶりに盛り付ける。

「ストップ。前も言ったけどさ、そんな盛り付け方じゃ華がないでしょ。もっとこう

円を描くように――」

蓮華がすかさず指摘する。

「あ、はい」

「ところで蓮華、いつまで特訓に付き合うんだい？」

ふと醇介が聞いてきた。

「んーと……帰れるまで」

ちょっと考えながら蓮華は答えた。

「どうせなら今日はうちに来ないか？ ここからだの家も近いし、泊まれるよ」

「そうね。醇ちゃんの家に泊まるの久しぶりだし、行きたい！」

醇介の提案に対し、蓮華は即答した。

「あの、蓮華さん。特訓はどこで切り上げますか？ 俺はいつでも構いませんけど」
置いてきぼりの麴が口を挟む。

「そうねえ……このラーメンを試食したところでおしまいにしようか」

「はい、ありがとうございます」

弟が手にラーメンを持ちながら厨房を出て、席に座った。

「ずるずるずる……ずずっ」

テレビの音とともにラーメンを食べる音が響く。麴を一口食べ終えたところで、表情が真剣になった。それを蓮華は頑なに見つめる。

「前とは全然違うよ」

頷いた後、麴は醇介に向かって言った。

「ほう、蓮華の指導のおかげか。俺も一口もらってもいいか？」

「おう、ほれ」

麴がどんぶりと箸を醇介に差し出す。醇介はそれを受け取り、麺を食べた。

「確かに美味しい。しかしソーセージをトッピングにしているのは変わってるな」

「麴君がどうしてもトッピングに使いたって言うからとりあえず認めたの。そしてら意外と美味しかったわ」

「確かに塩っ気と……何て言うんだろう？ 新鮮な脂がスープに浸み出ている感じが良いね。やればできるじゃないか麴」

「でしょう。でもまだまだだわ」

以前と比べて麴にコシがあり、スープに深みが出て、変な臭みがなくなっていた。だが、蓮華の言うとおりの、他の店と比べてまだ地味な感じが否めない。

「明日もまた特訓しましょう麴。同じ時間に来るつもりだけど大丈夫だよな？」

「はい、構わないですよ」

麴は快諾した。

「じゃあ、また明日ね」

「今日はありがとうございました！」

ラーメンを食べ終えた弟が入口まで送ってくれた。

「今日はお疲れ様だね」

店を出て、蓮華はふにゃーとした顔になった。

「結構頑張ったんだな」

「うんうん、仕事を終えてすぐ麴君の店に行ってがつつり特訓したからね。ふぁーあ、ビール飲みたいよう」

「晩飯はお前が作ってくれたし、帰ったら俺がちょっとした夜食でも作ろうか？」

「醇ちゃんの夜食かあ……嬉しいけど、体重が増えるし……それを考えるとビールもダメだし」

「特訓で体力使ったんじゃないのか？ その分の栄養補給ってことでいいじゃないか」

「うーん……そだね。じゃあ焼き鳥が食べたい！」

「よし、じゃあ早速家に帰って作るか。材料はそろっているはずだし。あ、でも串はないから鶏の丸焼きみたいになるけどいい？」

「全然構わないよ。酵ちゃんが作ってくれるものならなんでも嬉しいよ。あとそれと……」

子供のような笑みを見せる蓮華。いつも周りを見ていた時と違い、酵介は幸せそうな目で蓮華を見つめた。

水曜日の夕方、甘木は事務所で一人、客を待っていた。

「麦沢酵介……もしあいつがああ滞納者の兄だったら……」

高校時代、勉強も運動も酵介に全く敵わなかった。蓮華も酵介と付き合いようになり、彼と友情を結んでいながらも心底妬んでいた。

高校を卒業してからは、彼は酵介とは別の大学に通うようになったが、酵介に対する劣等感が残っていた。何でもいいから見返してやりたい、彼はそう考えていた。ある日、麦沢という借金の滞納者に電話をかけたら兄が電話に出てきた、という報告が甘木の耳に入った。

「これは面白い事になりそうだ」

もしかしたら酵介の鼻を明かすチャンスかもしれない。だからこそ、今日確かめる事にしたのだ。

時計の針が五時を指した時、丁度事務所に誰かが訪れた。

「入っていいぞ」

甘木は冷静に答えた。

「失礼します」

部屋に入ってきたのは久方ぶりの友人(ライバル)だった。

「甘木、久しぶりじゃないか」

酵介は再会を素直に喜んだ。

「酵介、相変わらずだな」

吐き出したい呪いを心の奥に潜ませながら、甘木は喜んだ。

「お前も変わってないみたいだな。仕事はどうなんだい？」

「ぼちぼちってところだね。それじゃ話し合いでも始めるか」

世間話を交えながらも、両者の事情を色々と語った。

「——さて、ここで本題なんだが、これを見て欲しい」

胸元から名刺を差し出す甘木。中央には『甘木 餃次』と書かれていた。その上には、一回り小さい文字で勤め先と役職が書かれていた。

「うちの会社に見覚えがあるみたいだな」

酵介は無言で名刺を凝視した。名前の上に『佐々金融 代表取締役社長』の文字がはっきりと印刷されていた。

「うちの部下が麦沢麴の家に電話した時、兄が出てきたと言っていた。名字に聞き覚えがあったし、弟がいるとも聞いたが、やっぱりあのときはお前が出ていたのか？」

「ああ。お前、弟に金を貸してることになるんだな」

「そういう事だ。それで俺からのお願いがある。どうかあいつに借金を返すように説得してくれないか。あいつ、返済期限が近いのに全然返してくれないんだ」

「と言われてもなあ……」

麴がラーメン屋を続けるとなると当分の返済は無理だ。

「あいつ自身の問題だからな。俺がどうのこうの言う事ではない。そもそもあいつは頑固で、俺が何言おうと全く折れないんだ」

悩みながら酵介は答えた。

「そこをなんとかしてくれないか？ でないとうちの部下が強制的に財産を差し押さえることになる。言うておくが、うちの部下に逆らうと命の保障はないからな」

甘木の口調が強くなった。酵介はまた悩み、どうするかしばらく考える。

「そういえばあいつ、ラーメン店を経営しているって話を聞いた。それもかなり不味くって客の入りが悪いそうだが」

やけに詳しい様子で甘木は言った。

「ああ、その通りだ。俺もあいつのラーメン食ったが、あまりの不味さに吐いちゃったよ」

「はははっ、やっぱりそうか。あんな店、すぐに置んじまえばいいのに。今ならあの辺の土地は高値で売れるぜ。借金なんて余裕で返済できるそうだ」

醇介は沈黙した。

——土地を売ることでやっと返せる金をラーメンだけで返済する。利子が膨らまないうちに売ればいいのか。

「どうだ、あいつを説得する気になったか」

醇介の迷いを察して甘木が言う。

「少し……考えさせてくれないか」

心が少し揺らぎながらも、醇介はこう答えた。

麴の借金をどうしようか、醇介は数日間ずっと考えていた。しかし、いくら考えても結論が出ない。ある日、悩みながらも、醇介は夜遅くに弟の店に寄っていった。

「うん、とりあえず合格！」

蓮華が弟に対して親指を立てた。

「やったあ。蓮華さんに認められたよ」

麴は嬉しそうに兄に報告した。

「やったな。ラーメン屋の娘に認められるなんてすごいじゃないか」

醇介は素直に褒めた。

「ここまでの腕になるのは大変だった……腕立て伏せと懸垂を何回やったことか」

「それってラーメン職人になるために必要か？」

「ラーメン職人になるためには身体もしっかりと鍛えなければやっていけないのだ」

当たり前のように蓮華が答えた。

「身体を鍛えているラーメン屋なんてお前の親父ぐらいな気がするんだが」

「だからうちのパパが作るラーメンは美味しいの。まあ、ひとまず合格としたけどまだまだこれからよ。やっと普通のラーメンが作れたってことだから。次は自分のラーメンを作る。それが課題よ」

蓮華は冷静に嗜める。そして微妙な表情で考え事をした。

「蓮華、何か不満なのかい？」

醇介が心配して声をかける。

「うーん、確かに麴君は上達したわ。他の店には負けにくいくらい美味しいラーメンを作るようになってきたの。けど……」

ちらと麴の顔を見る。

「麴君自身が満足していないような……そんな気がしたの」

「そんなことよりまともなものが作れる。それが大事じゃないのか？」

醇介が言う。

「彼の不満がラーメンにも出てるわ。美味しいけどあとひと押ししてところ。何回か作ってもらったけどあれ以上の出来はなかったわ」

「いやあ、そんな事はないですよ。俺はこんな立派なラーメン作れてうれしいです」

蓮華を心配させないように、麴は言った。

「麴、遠慮するな。何か困ってる事があるなら言っちゃいなよ」

醇介が言った。

「兄貴……その……」

俯きながら伝えようとする麴。そしてこう続ける。

「はっきり言ってよく分からないんだ。不満があるけど、何が不満なのかは分からない……でも、蓮華さんの指導には感謝してるんだ。おかげでラーメンの腕がこんなに上がったし」

醇介は黙って聞いた後、こう言った。

「そうか。まあ、いつか言えるようになったらいつでも打ち明けてくれよ。蓮華も心

配してるし。な？」

「うんうん。あ、でも私が欲しいってのはダメよ。酔ちゃんの彼女なんだからね」

「分かってますよ。こんな怖い彼女なんて欲しくないから……ってぐわっ」

「酔ちゃんの前で何を言ったのかなー？ あなたの脳みそに豚骨の脂でも注入しようか？」

失言してしまった麴が、蓮華の右腕で首を絞められる。

「ひいっ、ごめんなさいごめんなさいー」

「はい、もう酷い事言っちゃダメよ……はっ、酔ちゃんごめん！ こんな見苦しい所を見せて」

蓮華は慌てて謝った。どうやら麴を懲らしめる事に夢中になっていたようだ。それを見ていた酔介は笑っていた。

「はははっ、いくらでも懲らしめていいぞ。それで、話は変わるんだが……麴、お前はどうしてもここで店を構えたいのか？」

笑い終えた後、酔介の表情は真剣になった。

「もちろん。ここは俺らの伯父が作ったラーメン屋なんだ。努力してこの土地を買って、いなくなるまでずっと守ってくれたんだ。そんな土地を売るなんて俺にはできないぜ」

麴ははっきりと答える。

「そうか……伯父が作った借金のせいで苦労しているのか？ 今ならこの土地を売れば借金なんて余裕で返せるらしいぜ」

「ちょ、ちょっと酔ちゃん……」

売却を勧める酔介に対し、蓮華は戸惑う。しかし、麴は迷う事なくこう答えた。

「それでも構わない。俺はここで店を守りたい。どれだけ時間がかかっても、借金を返してこの店を続けたい」

酔介は何も言えなかった。この様子だと説得は無理だろうと感じたからだ。

それから一か月後。一時期は、店に客が入るようになり、日に日に忙しさが増していた。資金も貯まるようになり、借金も少しずつ返済できるようになった。

しかし、客足はまた元に戻っていった。どういうわけか営業時間が短くなり、休業日も入るようになった。

「酔介、弟の説得はどうしたんだ？ 店を畳んで、土地を売らせるんじゃないのか？」

ある日の夜、甘木は酔介を事務所に呼び出し、苦言を呈した。

「あいつの説得はできそうもなかった……って返済はどうなってるんだ？」

「一月前は僅かだったが返ってきた。だが、利子でまた元通りだ。どうにかしてくれないか」

怒りのこもった口調で甘木は訴えた。酔介は切り返しに悩んだ。ひたすら返済を求める甘木に対して、酔介は何も答えられなかった。

しばらく無言の状態が続く。時計の秒針が動く音だけが二人の耳に聞こえていた。

突然、酔介は腕に巻いてあった時計を取り、甘木の机に置いた。

「酔介、どうしたんだ？」

「こいつを売って、しばらく待つという事にしてくれないか？ 少なくとも百十万ほどにはなと思うさ」

文字盤やその周辺に埋め込まれた宝石が、外の灯りで輝いている。

「こんなもの、大した金額には——」

「あと、お前の好物の明太子を優待価格で提供、というのはどうだ？」

酔介はさらなる提案をした。

「俺は食品の卸売業をやっている。それもただの会社員じゃなくて社長としてだ。お前は明太子が好きなんだよな」

「ああ、そうだがこれじゃ——」

「三カ月分はタダで提供、というのはどうだ？ 品質もそこいらのスーパーでは手に

入らないものだけ」

「……………」

醇介の積極的なアプローチに対し、甘木は動揺した。追い打ちをかけるかのよう
に、醇介は自分の会社の物産品カタログをちらつかせる。

甘木はしばらく悩んだ後、こう決断した。

「……分かった。こんな明太子が三カ月分もタダで手に入るなら、ちょっとくらいは
待てるだろう。……にしてもやけに弟に入れ込むな」

甘木の言葉に対し、少し恥ずかしがりながら醇介は答えた。

「まあ、俺は麴の兄だからな」

「いいねー、兄弟というのは。だが、待つのは三カ月だ。それまでに完済できなけれ
ば財産の差し押さえだ。な、お前ら」

普通に笑いながらも甘木は無理難題を押し付けた。これに反応し、後ろにいる、がた
いのいい部下達が腕を組み直す。

「そんなもん無理だろ。第一、あいつは借金を借り換え続けてここにたどり着いたん
だけ」

「ならお前が返済したらどうだ？ 社長なんだろ？ まあ一番手っ取り早いのはあの
土地を売る事なんだがな」

「……………」

甘木の心には、醇介に対する支配欲で満たされていた。醇介が甘木に明太子を貢ぐ、
それだけの構図で堪能感に浸っていた。

「タイムリミットまで、しばらく待ってくれないか？」

——ラーメンを作りながら、三カ月で一億を払うというのはとても無理だ。やはり
自分も借金をして手を貸すべきか。

どうすべきか迷いながらも、醇介は麴のラーメン店に立ち寄った。

「よう、来たぜ」

勝手口から呼び鈴を鳴らしても誰も出ない。

「醇介だ。おーい、いるかー？」

呼んでしばらくして、ゆっくりと階段を下りる音が店から聞こえてきた。そして扉が
開いた。

「あ、兄貴……久しぶりだな」

前に会った時と違って、麴はやつれ、目の下にくまができていた。声も元気がない。

「どうしたんだ？ どこか体調でも悪いのか」

「ああ、ラーメンを食べすぎてな……ちょっと散らかっているけど上がるか？」

「ああ」

入口に入った所で、醇介は異様な臭いに包まれた。ビール、ベーコン、ニンジン、何
かを蒸したような匂い、それと腐臭——

「生ゴミでも放置しているのか？」

嫌そうな表情をしながら醇介は聞いた。

「その、味の研究をしている間に倒れちまって……こんな身体になっちまってゴミを
出せない状態だったんだ」

「よく玄関に出られたな。さっさと休めよ」

「ははは……すまん兄貴」

二人は二階の居住空間へと上がっていった。

麴を布団に寝かせた後、醇介は厨房の掃除をした。流しには数えきれないほどのどん
ぶりが放置されており、カウンターには食べかけのラーメンが置かれていた。醇介は
それらを黙々と片づけていった。

「まったく無茶しやがって。ちゃんと飯は食ってるか？」

片づけを終えて、醇介は麴の面倒を見ていた。

「ラーメンがあるから平気だ」
「倒れた原因はラーメンの食い過ぎだろ。お粥でも作るぜ」
「心配かけさせてすまん」
醇介はお粥を作り、台所を借り、麴は大人しく布団の中にいた。
お粥ができるまでの間、麴はふと呟いた。
「なあ、兄貴」
「どうした？」
「俺、やっぱりラーメン職人に向いてないのか？」
「何を言ってるんだ？」
「蓮華さんが教えてくれたおかげで腕も上がったし、今日まで店を続けられた。けど、それから先が上手くいかないんだ。今のままじゃ満足のいくラーメンが作れない。作ろうとしても上手くいかない。一時期は増えてきた客もまた来なくなった。このままだと借金が全然減らない。俺にはどうにもできないんだ」
弟の弱音を、兄はただただ聞いていた。
こんな意思の弱い奴がラーメン職人をやるなんて無理だろう。伯父の借金を勝手に背負わされているなんて愚かな弟だ。今なら説得して、土地を売らせる事が出来る。その方が楽だろう。醇介の頭の中ではそのような思いが巡り巡っていた。
しかし、醇介はそんな思いを口にしなかった。
「……とりあえず休め。お前は疲れているんだ」
「でも俺、店の時間を減らしているぞ」
「いいから休め。少しはラーメンから離れてみたらどうだ？ そうだ、体調がよくなったら一緒に飯食いに行こうぜ。俺のおごりでな」
「兄貴……」
自分をいたわってくれる兄に、弟は感謝した。
なんでこんな台詞が出たのかと醇介は思った。麴に店を畳ませたかったのは事実だ。しかし、同時に職人を続けて欲しいという気持ちもある。蓮華が努力して弟を育てた、それだけではない。
やっぱり麴はラーメンを作る時が一番輝いている。自分はそんな弟が好きだ。醇介の中ではそういう結論に達していた。

翌日の朝、麴は一人で厨房に立っていた。空き部屋に泊まっている醇介を起こさないよう、こっそりと一階へと降り、早速ラーメンを作っていた。体調は既に元通りだ。
「うーん……これも違う」
様々なスープを試して、一日何十杯も試食する。それがここ最近の日課だ。
「こんなにラーメン食っても全然飽きないんだな。俺だったら発狂するぜ」
厨房の入口に醇介がいきなり現れた。パジャマ姿に、寝ぐせで髪が爆発したような状態で、目をこすらせていた。
「うわっ、おはよう兄貴……今日は仕事ないのか？」
こっそりと下に降りた麴は驚いていた。
「だって今日は土曜日だろ？ 会社は休みじゃん」
「あ、そうだったね。じゃあゆっくり休んでいったらどうだ？」
「そうだな……って病み上がりなのにラーメンかよ。少しは休めよ」
試作中のラーメンを発見し、醇介は言った。
「あはは……あれだけ試作を繰り返すとラーメン作りが癖になったんだ。やっぱ休んだ方が良いよな」
「もちろんだ。それでさ、俺も試食していいか？」
「構わないぜ。試作中だから、口に合うかどうかわからないがな」
「いいんだ。もらうぜ」
カウンターから箸を取り、麺をすくい上げる。
「ずるっ、ずずずっ……」

細く、もっちりとした麺の弾力が心地良い。鶏がらの風味と丁度いい塩っ気が口の中に広がる。さらに、燻製された何かの香りが鼻腔をくすぐる。

「このスープ……ベーコンを使っているのか？」

「その通りだ。さすがだぜ兄貴」

「なかなか良いラーメンじゃないか。これのどこが問題なんだ？」

「兄貴の言うとおりに、確かに悪くないんだ。だが、何かパンチが足りない」

「俺はこれくらいがちょうどいいんだけどな。自分に厳しいんだな」

「これでもラーメン職人だからな」

麴はかっこいい台詞を口にすると、顔には『無理』という言葉が浮かんでいる。

「麴、朝飯ってこれだけか？」

「作ったのはこれだけだけど、あと十杯位は作るつもりだ」

「ラーメンばっかじゃまた身体を壊すぞ」

醇介は弟を嗜めた。

「それでよ、たまには一緒に外で食わないか？ 気分転換のつもりでな」

醇介が麴を連れていく形で、二人は定食屋に入った。

「俺、よくここの定食屋に行くんだ。今の時間は朝食の時間だが、常連は昼のメニューも選べるんだ」

そう言って醇介は麴にメニューを渡した。

「兄貴は何にするんだい？」

「俺はかつ丼定食にするぜ」

「そうか……じゃあ俺も同じやつで」

「よし分かった。すみませーん、かつ丼定食二つで」

厨房に向かって、大声で注文を伝える。

「たまには麺から離れてご飯というのもいいだろ。そういえばいつもはどんなもん食ってるんだ？ やっぱラーメンか」

「いつも残ったスープで自分の麺を作ってるぜ。ご飯もメニューにあるからそれも付けたりするが、毎日がラーメンだな」

店員から出された水を飲みながら麴は答えた。

「そんな飯で飽きないのか？」

「同じようで毎日の味が違うんだ。気温、湿気、自分の調子……全て組み合わせさって味ができる。同じ味なんてないんだ。毎日ラーメンを食べて、その日の自分を振り返り、次への糧にするんだ」

麴が熱く語る。

「お前、すげえな。やっぱり職人なんだな」

醇介は素直に感心した。

「毎日違う味ってのは、単にまだまだ腕がいまいちってことだけだな」

麴は苦笑いした。

「ところで、今日作った試作品ってどんなラーメンなんだ？ 塩か？」

「ドイツラーメンだ」

真面目に答える麴。

「ドイツ……ああ、お前が作ったものの中で、一番最初に食べたやつか」

醇介は苦笑する。かつて食べた不味いラーメンと、さっき食べたものが同じ名前なのが、醇介には信じられなかった。

「どうしてドイツラーメンなんだ？」

「だって、台湾ラーメンがあるならドイツラーメンがあっていいじゃないか」

当たり前のように麴は言った。

「お前、昔と同じ事言ってるな」

「だから、俺は俺のラーメンを作りたい。他の誰もが思いつかないものをな」

力強く語る麴。醇介はただ頷いた。

「おっ、かつ丼来たぜ」

しばらくして、店主が二人前のかつ丼と味噌汁を運んできた。巨大などんぶりに盛られたご飯の上に、どんぶりにぎりぎり収まるくらいの巨大なカツが乗っており、それをとろとろの玉子が覆っている。六百八十円の割にはかなりのボリュームだ。

酔介が美味しそうに食べている中、麴は箸をつけずにじっとどんぶりを見つめている。

「……どうしたんだ麴？」

「かつ……とろとろの玉子……」

箸を持ちながら麴は固まっていた。

「もしかして、あまり好きじゃないのか？」

「これだ！」

「できたぜ、ドイツラーメン！」

もわもわと湯気をたてるどんぶりの中には洋風の具で飾られた麺があった。前に食べたドイツラーメンとは全く違うものだった。

「ささっ食べてみ」

麴に勧められるがままに、酔介はラーメンに箸をつける。

「これは……」

コンソメを思わせるような味に、塩ラーメンとしての風味が違和感なく混ざりあうスープ。細麺が良くマッチしている。豚カツらしきものは、カリカリとした部分と、スープに浸かってドロドロになっている部分があり、なかなか良い。それはまるで——『ここは……どこなんだ？ ……もしかしてベルリンか？』

あちこちに佇む古き良き建造物。行き交う人達が話す言語。一度ベルリンを旅行していた酔介にとって、見覚えのある風景だった。彼の視線は、ある店の看板に向けられていた。一体何の店であるかははっきりと理解できていない。飲食店である事は分かっていた。それ以外を理解できないまま、ふらっと店内に入っていく。

『いらっしゃいませ！』

店内で呼びかけられた言葉で、酔介は一気に現実世界へと引き戻された。ドイツにある日本料理店の味、というイメージが彼の脳内で出来上がっていた。

「すごい出来じゃないか。こりゃ何杯でも食いたいな」

酔介が絶賛した。

「えっ、それ本当？」

突然、酔介の隣の席から何者かが現れた。

「うわっ、って蓮華か。いきなり出てきてびっくりした」

「ごめんごめん、ちょっと麴君のお見舞いに来たんだ。それで、これが新しいラーメンなの？」

「ああ、ドイツラーメンっていう弟の渾身の一品だ」

「うわー、すごそう！ 私にもちょっとちょうだい」

蓮華は積極的におねだりをした。

「はいどうぞ」

どんぶりを受け取った蓮華は目を輝かせながら、すぐ箸に手をつけた。その食べっぷりからして、『ちょっと』食べるとはとても見え難い。

「おいおい、食べ過ぎだろ。……まあいいけど」

「ずるずるずる……」

食べるのに夢中な蓮華に酔介の声は聞こえなかった。

「ふう……麴君、すごいじゃない。あれだけ美味しいラーメンを作るなんて、私尊敬しちゃう！」

「ありがとうございます！ まさか蓮華さんにここまで称賛されるなんて……うっ」

あまりの嬉しさに、麴の瞳に涙が溜まっていた。

「というわけで、この差し入れは私のデザートにしちゃおっと」

蓮華はビニール袋から高級そうなゼリーを取り出した。

「こんな美味そうなゼリーを……麴はそれでいいのか？」

麴は涙を拭くのに夢中で、ゼリーの存在に気づいていなかった。

新作のドイツラーメンのおかげでラーメン店は毎日繁盛した。麴はアルバイトを雇うようになり、店も拡張し、利益も日に日に上がっていった。借金の返済ペースも格段に上がり、信じられない事に二月で半分近くを返済していた。

「なんでこんなペースで返済できるんだ？　こんな絶対おかしいぞ」
独り言をこぼしながら、甘木は麴のラーメン店へ潜入した。

「へーい、らっしゃい」
威勢のいい声が厨房から響いてきた。まだ昼のピークに入っていないようで、店内では六人ほどの客が座っていた。

「あんたが麦沢麴か？」
座席に向かわず、厨房入口に向かい、甘木は尋ねてきた。

「はい、そうですけど」
「俺は佐々金融の甘木という者だ。誰だか分かるか？」
「はあ……誰でしょう？」
「俺が一億貸してやってんだぞ、それくらい忘れるなボケ！」

甘木は激昂する。
「す、すみません。何せ最近電話をもらっていないんで」
「は？　お前、兄に何も話を聞いてなかったのか？」
「兄貴が？　どういう——」
「そこの兄ちゃん、注文しないなら帰ってくれないか？　落ち着いて麺が食えん」
カウンターに座っている、帽子を被った中年の男が文句を言う。

「悪いがあなたには関係のない話だ。黙ってラーメンでも食って——」
「おーい兄ちゃん、こいつにドイツラーメンを一つ」
甘木の声を見無視して、男はラーメンを注文した。それに応えて、麴は麺をゆで始めた。

「おいてめえ、俺を見無視してんじゃねえ」
「まあまあ落ち着け。兄ちゃんのラーメンでも食ったらそんな事どうでも良くなる」
「ごちゃごちゃ言いやがって……」
「それでも不満だというなら営業妨害で訴えるぜ。俺が言う事ではないがな」
「ぐぬぬ……」
「ほれ、そこの若者が餃子でもやると言ってるようだ。まあゆっくりしとけ」
小さな四角テーブルに座っている若者が、甘木に餃子を差し出す。その若者も、帽子を深々と被っており、素顔が見えない。

「いらん。だったら待とう」
　　なんだかんだで、甘木は大人しくカウンター席でラーメンを待った。

「へい、お待ち」
しばらくして、出来たてのラーメンが、湯気を立てて出てきた。

「これは何だ？」
普通とは違うトッピングを見て、甘木は怪訝な顔をした。

「食べてみりゃ分かる。騙されたと思って食ってみな」
「……………」

不満あり気にしながらも、甘木はラーメンに箸をつけた。
「んなつ、これは！」

一口食べた途端、彼に衝撃が走る。日本にあるドイツ料理専門店、彼の頭にはそれが浮かんでいた。

「ドイツであってドイツでない、ラーメンであってラーメンでない……ずずず」
独り言を口にしながら、彼は食べるペースを上げていった。

「どうだ、美味いか？」
中年の男が聞いてきた。

「おお、うまい」

「ハッハッハッ、そうだろう。うちの甥(おい)だけあって、すごいだろう」
男は帽子を外して、慣れ慣れしく甘木の肩を叩いた。
「ちょっと待て、今甥って言いましたよね?」
不意に、若者は問いただした。
「ああ、麴は俺の甥だが……」
「「も、もしかして……」」
甘木と若者が声をそろえる。
「伯父さん! 久しぶりじゃないか」
男の素顔を見るなり、麴はびっくりした。
「えっ! あんたが俺らの……」
帽子を外した若者——酔介もあっと驚く。
「俺ら……ああ、君は酔介か。こうやって会うのは久しぶりだな。俺は水原冠水だ。
名前くらいは覚えているか?」
酔介は頷く。
「伯父さん、なんで今頃帰ってきたの?」
「借金の状況はどうかと思ってちょっと某国から帰国してきたんだ。店が立派になっ
ている様子からすると、結構頑張っているみたいだね」
伯父はさらりと事情を話した。
「いやあ、麴に店を託して良かったよ。おかげで返せそうもない借金も大分減ってき
たし、店も大繁盛だ。海外に逃げてきた甲斐あったぜい。麴、ラーメン屋を続けてく
れてありがとな。あとは俺が店をやるから、麴はもう休んでいいぞ」
何の躊躇もなく伯父が喋っている途中、何かが折れる音がした。酔介の右手には、
折れた割り箸が握られている。
「あのなあ、お前のせいでどれだけ俺らに迷惑がかかったか分かるか?」
「おいおい酔介、どうしたんだい?」
「……良い事思いついたぜ」
酔介は伯父の首根っこを掴み、甘木の前に突き出した。
「おい、何のつもりだ?」
突然の酔介の行動に対し、驚く伯父。
「甘木、借金の元凶はこいつだ。こいつが身体を張って稼いでくれるってさ」
「待て、出会ってすぐに俺を売るのか?」
「うるせえ、麴に借金押し付けてんじゃねえ。お前もそう思うよな」
酔介は麴に質問を投げかけた。
「俺は伯父から店をもらったし、まあいいかと——」
「だが借金有無を言わずに押し付けられたよな?」
「あ、ああ——」
「というわけだ甘木。ここに借金を作った主がいる。こいつに払ってもらおう」
「そんな、俺は——」
「そんな事を言われても俺は困るが」
目の前の展開に呆れる甘木。
「俺は連帯保証人だ。こいつを売ってやろう。これで完済だ、いいな?」
虚実を交えた滅茶苦茶な事を、酔介は圧力をかけて甘木に言った。
「頼む、やめてくれ」
伯父は必死に懇願する。
「無茶な要求だ。こんなおっさん渡すくらいなら土地をくれ。第一、お前は連帯保証
人じゃないだろう」
「こいつの臓器を売っても、借金分以上の額になると思うぜ。連帯保証人については
明太子サービスの時に言ったと思うが忘れたか?」
「そんなの聞いた事ないぞ」
「明太子が好きすぎて舞い上がってたんだっけな? まあ、受け取らないというなら
明太子三カ月のサービスはなしな」
「くっ……勝手な事言うな」

「こいつをもらうなら明太子サービスは一年分に伸ばすぜ」
「お前ら、こいつを捕まえろ」
特典を聞くや否や、甘木はすぐ店の入口に向かって合図をした。
「了解(ラジャ)」
それと同時に、がたいのいい男二人が伯父を捕らえ、店の外へ引っ張っていった。
「ちょっ、待て! 俺を連れてくな……、やめてくれーっ!」
伯父は大声で抵抗しながらも、引きずられていった。
「はぁ……今日のところは帰るぜ。じゃあな、酔介」
不服そうにしながらも、甘木は去っていった。
「あいつの特典に乗らなければ良かったのに……くそっ悔しいぜ」
最後に独り言を残す甘木。それを聞き、扱いやすい奴で良かった、と酔介は思った。

こうして、麦沢兄弟に平和が訪れた。
「伯父さんって今何してるのかな？」
営業時間が終わり、麴は酔介に聞いた。
「今頃マグロ船じゃないか？」
「マグロ船って確か——」
「アレの事? 船盛りみたいな、女体盛りみたいなやつ」
蓮華が口を挟んできた。
「何が言いたいんだ? ……って変な想像をしたじゃないか」
酔介は嫌そうな顔をした。
「でも実際はどうなんだろうね? マグロ船って都市伝説とか言われてるし」
「麴、賢くなったな」
神妙な顔で酔介が言う。
「何それ、褒めてんのか？」
三人でわいわい話している間、勝手口の戸が開いた。
「たらいまあ……」
よれよれの中年男性が扉から現れた。
「伯父さん、おかえり」
真っ先に麴が声をかけた。
「おや、身体は売り飛ばされなかったのか？」
酔介が聞いてきた。
「なんとか逃げ出したぜ……変わり身の術を使ってな」
荒い呼吸をしながら伯父は答えた。
「忍者みたいな奴だな。どこで覚えた……ってか逃げたならうちらヤバくないか？」
と酔介が言う。
「それなら一応、佐々金融と臓器商人の取引が終わった後に逃げたから甘木の所からは追ってこないはずだ。だが商人側がやばいな」
「まあ、せいぜい逃走を頑張る事だな。某国を旅してきたんならそれくらい容易いだろう？」
他人事のように酔介は言った。
「薄情者め。匿う事くらいしてくれよな」
「これ以上迷惑かけるなら、臓器商人に突き出してもいいけど」
麴が呟いた。
「麴も俺を見捨てるのか? 酷い……」
「ところで伯父さん、ラーメン作ろうか? 特製のドイツラーメンがいいぞ。一杯で三百キロは走れるんじゃないか？」
伯父の訴えをスルーする麴。
「ああ、一杯くれ」
カウンター席に座って、伯父は頼んだ。

「そういえば俺らも晩飯食ってないな。俺らにも作ってくれないか？」
醇介も彼女の分を合わせて頼んだ。
「承知しやした！」
職人、麦沢麴は早速麺を茹で始めた。

[戻る](#)